

# 動物園水族館関係者を対象とした専門職的な 大学院に関する意識調査

浅川満彦\*・横田 博\*・市川 治\*\*

## はじめに

現在、酪農学園大学は、大学改革の一環として、大学院構想検討委員会（委員長 市川：研究推進センター準備委員会兼務）を設置し、専門家養成の修士課程（2011年4月に開講予定）の原案策定作業が実施されている。その中には本学の酪農学部、環境システム学部および獣医学部から選抜された教員と学外専門家により、動物科学に広く対応した専門家養成のための課程が含まれている。特に、獣医学部からは2008年1月、動物衛生学（以下、衛生）、保全医学（以下、保全）、生産および伴侶動物医療学（以下、それぞれ生産・伴侶）のコースが提案された。なお、本文を執筆している2009年2月時点では、若干変更があり、動物衛生学と生産動物医療学との融合が、また、保全医学は環境システム学部提案している野生生物保全学との擦り合わせが提案されるなど、結論は未決である。しかし、いくら優れた結論であっても、ニーズが無ければ画餅である。そこで、下記要領に従い予備的な意向調査を実施したので報告したい。

## 調査時期、被験者および方法

2008年2月1日から同年5月10日にかけて、動物園・水族館（以下、園館）に勤務される方々にアンケート調査を実施した。園館関係者を対象にした理由は次の通りである。前述の衛生、保全、生産および伴侶のコースのうち、保全以外の3分野はその概念や具体的な内容はよく知られ、関連の職域も確立されている。しかし、保全医学は医学・獣医学および保全生態学の新興的な複合分野で、日本では獣医学・応用動物科学の専門家すら認知されていない（浅川、2002, 2008）。しかし、この分野が扱う内容は園館の獣医師、飼育担当者、学芸員、研究者お

よび管理者などの業務が密接に関連する。したがって、現在、そのような職にある方々の意向は、計画立案上、基盤となると予想されたことからである。

（社）日本動物園水族館協会登録159園館宛に送付された依頼文書および質問項目など図1のようなものであった。

## 結果

送付直後、2園館から宛先不明として返送されたので、依頼文書が送付されたのは157園館となる。うち、67園館（園館名無記名9を含む）から回答が得られた（回答率40.8%）。回答頂いた園館の内訳は、動物園48（登録動物園の約半分強）、水族館19（登録水族館の約三分の一）であった。

こちらから送付したアンケート用紙（図1）は1部であったが、同一施設から複数回答を返送された園館が7つあったため（中には、一動物園から16名の回答を頂いた事例もあった）、回答者の総数は回答園館数を32上回り99となった。回答者99名の職種は診療38、飼育38、その他（事務職、学芸員、園長など）10、診療・飼育兼務10、診療・その他兼務1、飼育・その他1、診療・飼育・その他兼務1であった。回答者の氏名および年齢は任意としたが、ほぼ半数47名の方は氏名をご記入頂いた。また、年齢をご記入頂いたのは63名で、その年齢幅[平均年齢(SD)]は24~59[39.9(10.15)]であった。

以下では、設問への回答結果を比率%（括弧で示す）で示す場合、この回答者総数99を分母にしたが、複数回答があった設問2と4は、それぞれ回答総数を分母にした。なお、設問6で62名、設問7で52名の方が、自由記載という形でご意見を寄せられたが本拙稿では省略した。

\*酪農学園大学獣医学部（Mitsuhiko Asakawa, Hiroshi Yokota）

\*\*同・酪農学部（Osamu Ichikawa）



School of Veterinary Medicine, Rakuno Gakuen University

582 Bunkyo-dai-Midorimachi, Ebetsu, Hokkaido 069-8501, Japan  
Phone : 81(Japan)-11-388-  
Fax : 81(Japan)-11-387-5890

2006年2月吉日

日本動物園水族館協会 園長殿  
診療および飼育担当責任者 殿酪農学園大学大学院獣医学研究科  
研究科長 教授 横田 博動物医学専門家養成のための独立大学院に関する  
アンケート調査、御協力依頼について

皆様には益々ご健勝のことと存じます。

常日頃、本学への教育・研究に格別なご指導願ひまして心より感謝いたします。

さて、酪農学園大学獣医学研究科では2009年度開始を目標に、本学全学部から選抜された教員により独立大学院（各学部から独立した2年間の専門職修士課程）「動物科学研究所修士課程」（仮称）を創設し、獣医師、動物衛生および環境保全分野における高度技術者教育を実施することを構想中です。その概要を下記に示しましたが、日頃ご理解ご協力をいただいている方々のご意見を反映させた内容にしたいと思っております。つきましては後半のアンケートにお答えしていただき、貴重なご意見をお聞かせ願えれば幸いです。酪農学園の発展にますますのご理解とご協力をお願い致します。

現時点での意図は以下の通りです。

## 1) 大学院修士課程設置の目的

獣医師/動物衛生/環境保全分野における高度技術者教育を行う

## 2) 定員・学位

独立大学院（各学部から独立した2年間、定員20名程度）とする。

&lt;学位（認定書）&gt;

## 1. 動物衛生学修士（衛生/行輪/管理/繁殖/経営/食生産技術）

## 2. 保全医学修士（土壌/水域/動植物生態/環境保全/野生動物）

## 3. 生産動物医学修士（生産動物診断治療各種技術）\*

## 4. 伴侶動物医学修士（伴侶動物診断治療各種技術）\*

## \* 獣医師のみのコース

## 3) スタッフ

関連専門分野で研究業績や大学院教育実績を考慮して、三学部の中から学長が選考し、大学院兼担を依頼する。

## 4) 教育

院生はスタッフの各学部研究室に所属する。

1年目：共通科目（動物解剖/生理/病理生体/環境など）中心

2年目：各研究室での演習中心で修士論文を完成させる。

## 5) 入試

出願資格 学部所属研究室教授の推薦書

一次試験 筆記試験

二次試験 卒論内容プレゼンテーションと面接

## 6) 進路

獣医師の場合は、修了後は獣医師専門医を目指す。または博士課程3年目に進学する。

獣医師以外の場合は、修了後、アセスメント関連資格/（動物衛生検査技師）/などを目指す。または、博士課程へ進学する。なお、成績優秀（修士課程の学業成績と修士論文の内容で判断）者は10名程度獣医学部3年次への編入を許可する。

以上です。現在、その実現に向け、鋭意、努力中です。しかし、教員だけでは閉塞された論議となります。そこで、設立の基盤のための貴重なアドバイスをいただき、下記にご回答よろしくお願ひいたします。

質問項目（回答は別紙にご記入ください）

1. このような大学院が新設された場合、あなたは興味を感じますか？
2. 興味を感じた方へ、どのようなコースに興味を感じましたか？
3. あなたが進学してみたいと感じますか？
4. 進学してみたいと感じた方のようなコースに感じましたか？
5. 現在のお仕事の中で大学院（社人）に在学され、専門的研究や勉学を進める必要性を感じますか？
6. 5. で必要と感じた方へ、どのような内容をお求めでしょうか？
7. その他、ご意見がありましたら、ご自由にお書き下さい。

図1 本調査で用いた依頼書およびアンケート用紙（実物）

設問1：このようなコースに興味を感じたかどうかの回答では、「興味を感じた」が81名（81.8%）と最多で、「感じない」15名（15.2%）、「その他」3名（3.0%）であった。

設問2：興味を感じたコースの選択では、17名が無記入であった。選択された82名のうち、22名が2から4つの複数コースを選択されていた。選択された項目数の合計は109となった（これを分母とする）。多い順に示すと、保全69（63.3%）、衛生19（18.1%）、伴侶14（13.3%）、生産7（6.7%）であった。多様な動物や自然生態系まで目配せされた保全医学に高い関心を示されたことは予想されたが、臨床系よりも衛生に関心が高いことは、現実面でこの課題が多く内在することが示唆された。

設問3：進学してみたいかどうかの回答では、「したい」37名（37.3%）、「したくない」25名（25.2%）、「その他」37名（37.4%）であった。

設問4：実際に進学したいコースは、設問3で「したくない」方も回答されているので、この設問で選択された方の合計は58名となった。また、11名が2から3つの複数コースを選択されていたので、選択された項目数の合計は68となった（これを分母とする）。多い順に示すと、保全44（64.7%）、衛生11（16.2%）、伴侶9（13.2%）、生産4（5.9%）と設問2とほぼ同様の傾向が示された。

設問5：本学で検討している専門家養成に特化した修士課程創設の必要性については、「必要」60名（60.6%）、「不要」30名（30.3%）、「その他」9名（9.1%）となった。必要と感じた方は過半数ではあったものの、設問1の結果を考慮すると、回答した約五分の一の方が興味はあるが、時期尚早ではないかという印象を持っているのであろう。

## 考 察

今回、動物園の方が水族館よりも多くの回答が寄せられたのは、水族館が基本的に水産系関連施設であることから、畜産・獣医系に近い本案件に回答し難い可能性があったことが推し量られた。また、一園館から複数の回答者を頂いたことは、施設により本課題に対する温度差の存在が示唆された。

設問1と5からご回答下さった多くはコースに興味を持つが、時期尚早という印象を持たれていた。また、設問3「その他」では多くが進学を希望しても現実的な業務の関係から難しいという回答が大部分であった。このことから開講方法に何等かの工夫が必要であることが判った。対象者が園館関係者であることから多様な動物や自然生態系まで目配せされた保全医学に過半数が興味・必要性を示されたが、設問2と3で示すように他の衛生や臨床分野も決して低くないことが明確にされた。

## ま と め

以上を踏まえ、日本にも望ましい関連コースを設立し、次代を担う人材養成貢献の基盤情報としたいが、このような試みは一大学で完結し得るものではなく、今回ご意見を寄せられた園館の皆様、他の大学・研究機関との連携のもと立ち上げたいと願っている。本拙文をお読みになり、もし、ご意見・ご要望があれば、是非とも、ご連絡を賜いたい（本件連絡先：浅川 askam@rakuno.ac.jp）。

## 謝 辞

本調査に積極的にご協力下さった（社）日本動物園水族館協会登録園館に勤務される方々に深謝する。本調査は2007年度酪農学園教育充実費の助成を受け実施された。

## 文 献

- 浅川満彦 (2002). 応用動物学と獣医学との連繋による専門職大学院構想—英国野生動物医学 MSc コースを一例にして. 畜産の研究, 56 : 779-784.  
浅川満彦 (2008). 保全医学に関する専門教育の現状と今後. 酪農学園大学紀要, 自然科学, 32:169-178.

## 農業畜産情報

## 家畜福祉 豚と採卵鶏で指針 畜産技術協会 肉用牛も議論へ

畜産技術協会は3月23日、東京都内でアニマルウェルフェア(家畜福祉)に対応した家畜の飼養管理に関する検討会の事業推進委員会を開き、豚と採卵鶏に関する飼養管理指針を採択した。家畜の快適な環境に配慮した飼養管理を求めるもので、今後は業界向けにセミナーや冊子の配布を通じ、普及を図る。また、新たに肉用牛も分科会を設け、議論を始める。

アニマルウェルフェアは近年、欧米を中心にガイドラインなどが策定され、日本でも2007年から豚と採卵鶏で論議がスタートし、08年には肉用鶏や乳用牛の検討が始まった。

指針ではアニマルウェルフェアという言葉を用い、「快適性に配慮した家畜の飼養管理」と定義。快適な飼養環境が家畜の能力アップ、生産性の向上にも

つながるとした。

これを踏まえ、豚、採卵鶏とも健康状態を常に把握することが必要であると、少なくとも1日に1回の観察を実行し、観察記録を残すことを求めた。また、管理や給餌、給水、畜舎、飼養方法などの分野で望ましい取り組みも盛り込んだ。

具体的には、豚は新生子豚の管理の中で歯切りや断尾、去勢を実施する場合、生後7日以内に行う。また、採卵鶏ではケージ飼いの場合、高さは40センチ以上、卵を集めるための床の傾斜は8度以下が望ましいなどが盛り込まれている。

委員会では採卵鶏の指針の中で、診療の機会提供や死亡した鶏への対処などで議論が起こったが、案通りに採択した。